

徳川斉昭と「有志」大名の情報ネットワーク

星 山 京 子

序 従来の徳川斉昭研究

時勢も顧みず生涯一貫して、攘夷の断行、蘭学の禁止を主張し続けた政治家・徳川斉昭（一八〇〇—一八六〇）の固定的なイメージは近年、先学によって徐々に払拭されてきたと言えよう。斉昭の西洋学術への関心を指摘する研究は戦前から存在したが、戦後もこの方面の研究は数少ないが継続して行われ、偏狭な排外思想家・斉昭のイメージを揺るがすものとして貢献している。

天保期（一八三〇—一八四三）から安政期（一八五四—一八五九）にかけて斉昭主導のもと、水戸藩は他藩に先駆け、蘭学者の招聘、蘭書の翻訳事業に着手した。⁽²⁾ 福田耕二郎氏にかかる水戸藩の西洋学術受容を目的とした数々の政策、藩主斉昭自らの積極的な蘭書の収集および西洋学術に対する高い関心を指摘しているが、一方で「日本の固有の文化に血とし、肉としようとしたもので、あくまで批判的であった。」⁽³⁾

と分析する。

また鈴木暎一氏も斉昭主導の水戸の西洋学術導入が後の諸藩の洋学摂取の先駆的事例であることを評価した上で、「天保期以降、藩主斉昭の手で大名有志との蘭書の貸借と洋学的知見の交流、蘭学者の招聘が積極的に行われ」⁽⁴⁾ たことを指摘、その詳細な実態を明らかにしている。しかし斉昭は西洋学術の有用性に早くから着目していた一方でその弊害を強調、自由な学習を禁止したために「万延元年八月に斉昭が死去して、洋学摂取の道が途絶えると、個人的にはともかく、藩としては何もみるべき成果を収めることができなかつた。」⁽⁵⁾ と評価する。

以上の論考に代表されるように徳川斉昭の西洋学術への興味、関心を指摘する従来の研究の大部分に共通している見解は、斉昭が西洋学術の有用性をいち早く認め積極的な導入をはかった点は認めうるものの、一方、生涯それに対する警戒心を解かず、藩内での学習に関しても様々な規制を設けたことがその後の発展を阻んだ、というものである。薩摩

藩、長州藩、佐賀藩等、後に国内でも有数の洋学の先進地域に発展した藩と比較しても、水戸の蘭学はその後、停滞したと言わざるを得ない。天保期の水戸藩の蘭学導入が幕府や他藩に先駆けて行われた先駆的事例であったにもかかわらず、幕末洋学史の中で水戸藩や齊昭が取り上げられることがほとんどないのもこのためだと思われる。⁽⁶⁾

また一八五三年(嘉永六)のペリー来航後、齊昭が幕府において提言した外交政策である、内戦外和論に⁽⁷⁾関しても、長年の持論であった攘夷の実行を齊昭が本気で考えていなかったことの「証左としてこれまでたびたび指摘されている。⁽⁸⁾齊昭はペリー来航後の海防参与就任後、一週間足らずの一八五三年(嘉永六)七月初旬、『海防愚存』を著し時の老中阿部正弘(二八一九—一八五七)に提出した。本書の中で齊昭は開港、貿易は断固、拒絶すべきこと、打ち払いの復活、武備の充実などを強硬に主張しているが、同時に一枚の付箋にこう記している。「和の一字は封じて、海防掛りのみのあづかりに致し度事に候。」⁽⁹⁾またほぼ同時期に松平慶永(二八二八—一八九〇)に宛てた書簡の中に「拙老は内戦に外和に致し候方と存候。」⁽¹⁰⁾という一節が見える。

齊昭は時勢を深慮せず、時代遅れで偏狭な攘夷論を本気で唱えていたのではなく、主戦論は国内に対する士気の昂揚、すなわち精神的な効果を生み、ひいては軍備増強につながると考えていた。明治の政治評論家、福地源一郎(一八四一—一九〇六)はかかる齊昭の内戦外和論にふれ、「烈公は固より無謀の鎖攘論者と云ふにはあらず、随分時勢をも斟酌せられたり」と評価する。⁽¹¹⁾

また瀬谷義彦氏は、内戦外和について「表面は強い攘夷主義の態度をとりながら、裏面では彼我戦力の相違を認め、和もやむを得ないとするのである。」⁽¹²⁾とし、このような態度を「世界情勢の変化に⁽¹³⁾応ずる柔軟性」と分析する。ペリー来航後も攘夷を可能だと信じていたのではなく、齊昭にとつての攘夷は国内の士気を喚起するための戦略的意味を持っていたという解釈は妥当であろう。しかしペリー来航後、海防参与に就任、幕閣内において念願の指導的地位を得たにもかかわらず、齊昭はその場のぎ的ながらし策を打ち出すのみで、当時、混乱の最中にあった国内外情勢を打開すべく、なんら有効な策を打ち出せなかったという批判から免れることは困難であろう。⁽¹⁴⁾

石井孝氏は齊昭の内戦外和論についてこう評価する。「和」とはいつでも、正式に交渉して条約を締結するという遠大な計画があるのではなく、当面、戦争を避けるという弥縫策にすぎない。齊昭の攘夷論は、現実の強大な外圧の前に行き詰まってしまった。⁽¹⁵⁾さらに、ペリー来航以後も一貫して攘夷論に固執した態度を「極度に逆行的」、かつ「反動的」⁽¹⁶⁾とする。山川菊栄氏は「烈公も東湖も攘夷は不可能であり、そのため戦争は危険だと知りながら、行きがかりのため、古い言い分は清算せずに死んだことが藩に思想的混乱を残した結果となりました。」⁽¹⁷⁾と幕末の水戸藩の動乱の責任を齊昭を含めた当時の水戸藩の指導者に帰している。⁽¹⁸⁾このように幕末政治の表舞台に表れた齊昭の言動を辿り、政治家としての資質を評価するとすれば、やはり現在においても否定的な見解を出さざるを得ないように思われる。

しかし以上述べたような徳川斉昭像は幕末政治史の表舞台、すなわち「公」の場という限定された場面から浮上した言動を基礎に構築されたイメージであると言える。従来の斉昭研究を概観すれば、そのほとんどが斉昭が幕府に対して提出した上書、幕閣での言動、あるいは公刊された文書を基礎として斉昭を描いているのである。本稿では「公」の部分が強調されることが多かった従来の斉昭研究から目を転じ、ペリー来航時の老中、阿部正弘、薩摩藩主、島津斉彬（一八〇九—一八五八）、宇和島藩主、伊達宗城（一八一八—一八九二）等の有力大名との間に交わされたプライベートルな書簡を主に検討してゆくことによって、従来あまり触れられることのなかった「私」の場面における斉昭を取り上げ、新しい徳川斉昭像を提示してみたい。

斉昭の蘭学に対する関心を指摘する研究は、数少ないものの、戦前のものにはすでに見られる。⁽¹⁹⁾ 例えば高須芳次郎氏は『水戸学講話』の中で、斉昭の西洋学術導入に対する積極性を示唆しているが、「西洋学の長所を学び、これを正しく生かして、日本の富強に資しようとしたのだ。それによると、水戸学派の西洋学に対する傾きが、決して偏狭でもなく、固陋でもないことが分る。」⁽²⁰⁾ とする。つまり斉昭は西洋学術摂取に対して意欲的であったが、それはあくまでも彼の採長補短主義からきたものであり、日本の利益を旨とすることを主眼としていたとする。しかし戦前の研究書における斉昭の西洋学術摂取の指摘は、水戸学を当時の天皇制政府の思想的根柢とする立場から著されたものが多く、斉昭の事績を賛美しようとする意図が少なからず見うけられるのである。

また戦前のものを含めて、斉昭の西洋への興味関心を指摘する研究はこれまでいくつが存在するものの、そのほとんどが西洋学術摂取の事実を指摘するのみにとどまっている。例えば福田耕二郎氏は「徳川斉昭と蘭学」⁽²¹⁾ において天保期、安政期（一八五四—一八五九）の斉昭主導による水戸藩の蘭学者の招聘、蘭書の翻訳事業について指摘しているが、その態度は「日本の固有の文化に血とし、肉としようとしたもので、あくまで批判的であった。」⁽²²⁾ と結論づけるのみにとどまっており、先の高須氏の論考の域をでない。つまりこれまでの研究の大半は、斉昭の蘭学に対する関心の伝記的記述のみにとどまっているのであり、斉昭の蘭学に対する関わり方や蘭学に関する政策に関する詳しい分析や、蘭学批判も含めたその全体像の検討はほとんどなされていないのである。⁽²³⁾

ペリー来航を目前に控えた時期、欧米列強による侵略の危機を日々切実に感じ、対策を打ち立てるべく奮闘していた「有志」大名らは、西洋学術知識、対外情報の摂取という目的のために斉昭のもとに結集した。彼らの活動を詳細に辿れば、斉昭を中心とした「有志」大名らによる西洋情報ネットワークの実現を見ることが出来る。「幕末の四賢候」と並び称され、のちに幕末史を左右するようになるこれらの「有志」大名たちがまだ若年の時期にプライベートルで斉昭と親密な交際をしていた事実に着目したい。彼らはいかなる知識や対外情報を交換し、また情報ネットワークの中心的存在であった斉昭はここで具体的にどのような働きをし、また若年の大名たちがいかなる影響を与えたと言えるのだろうか。⁽²⁴⁾

本稿ではこれまで幕末政治史の表面に浮上する言動をもとに論じられることの多かった徳川齊昭の、幕末政治史における影の働きに注目したいと考える。決して表面に出ることはなかった齊昭の水面下での活動は幕末史においていかなる意味を持つのだろうか。最終的にはこのような問題にまで議論を深めていきたい。

一 幕府とのコネクションー阿部正弘との交流

齊昭は一八四四年(弘化元年)五月に水戸の天保改革に関して幕府から致仕謹慎を命ぜられ、江戸の藩邸内に屏居となった。同年十一月、謹慎は解かれたが五年後の一八四九年(嘉永二年)まで藩政関与は許可されず、この間不本意にも隠遁生活を送ることとなる。

しかしこの隠遁生活を齊昭は決して無為に過ごしていたわけではない。それどころか西洋学術や迫り来る欧米列強に関する対外情報の入手や西洋学術知識を学ぶためのネットワーク作りという点において、この隠遁期間はきわめて有意義であったと言わねばなるまい。というのもこの弘化年間(一八四四―一八四七)から安政年間にかけて、齊昭は伊達宗城、宗紀、松平慶永、島津斉彬、阿部正弘らの有力大名と交流を持つようになり、頻繁に書簡をやりとりするようになるからである。⁽²⁵⁾

齊昭の持っていた幅広い人脈の中でも、対外情報収集、蘭学学習、および蘭書や幕府秘蔵文書の調達を大きく助けたのは、一八四五年(弘化二年)に老中に就任した阿部正弘の協力が大きかった。齊昭と阿部の書簡の交換は阿部の老中就任の年からはじまっている。往復書簡における

二人の専らの話題の中心は接近する異国船に対する処置、武備の充実の必要性に関するものであったが、幕府が欧米との間に交わした外交文書や風説書等、その他、外交上の秘蔵文書の貸与を齊昭が求める場面が多く見られる。以下はその一例である。

一 昨年夷狄使船之願書并御返答ハ勿論此度献上之品さへも承知不致候所旧冬よりハ如何之訳か小石川より御城書相廻り候故右之内ニ可有之哉と存候所献上物之儀見え不申候得ハ他へ御秘ニ相成候儀と察候処異国人ハ三親藩より御親き儀ハ有之間敷へハ外国より之願書并御返答献上品等伺申度事ニ候箇様申ハ如何ニ候へ共右等之義ハ秘候事ニ善事ハ無之ものに候⁽²⁶⁾

本書簡は弘化二年二月一日の齊昭の書簡であるが、その一昨年に欧米列強が幕府に渡した文書、およびそれに対する幕府の返答書、さらにその他にも幕府所蔵の外国の風説書や献上品等を包み隠すことなく、貸与してくれるようお願い出ている。阿部はこのような齊昭の要求に対し、早速、十三日後の二月十四日付の書簡において同年に幕府に呈されたオランダ国王の開国勧告書、ならびに献上品リストの写しを齊昭宛の書簡において添付しているのである。⁽²⁷⁾

このように欧米列強から幕府に渡された書簡やそれに対する幕府の返答書、その他幕府が所蔵している外国の風説書の貸与を齊昭が求める場面は両者の書簡中、頻繁に見られる。特に長崎や浦賀、琉球等において弘化年間以降頻繁になりつつあった欧米列強の貿易要求の事件に関して

は特に注意を払い、これらの情報をキャッチすると敏速にその詳細な情報を得たい旨を阿部に書き送っている。

例えばアメリカ人司令官ビッドルが浦賀に来航し、通商を要求したのは一八四六年(弘化三年)五月のことであったが、この情報をキャッチした斉昭はその翌月、阿部宛の書簡において次のように求めるのである。「此度浦賀ニ寄候舟よりハ如何の願申立候哉又如何様の御答ニ相成候哉不苦候ハ、相伺申度候」阿部は斉昭の要請に応じ、同年七月八日の斉昭宛の書簡の中でビッドルが提出した文書の和訳および献上品のリストを斉昭に提示している。⁽²⁹⁾ また同年六月にもフランス人司令官セシュが長崎に来航、薪水と漂流民の救護を求める事件が起きたが、この一件に關しても、斉昭は「六月初旬長崎への願書拝見奉願度事」⁽³⁰⁾と書き送り、阿部は翌月、この一件に關する長崎通詞からの報告書ならびにフランス船が幕府に提出した願書の写しを斉昭に送っている。⁽³¹⁾

阿部は外交文書の閲覽を願う斉昭の要請に対し協力を惜しまなかったようである。『新伊勢物語』の中には、上に挙げた以外にもオランダからの風説書、日本沿岸の漂流民の口書、薩摩藩が幕府に提出した琉球情勢に關する報告書、対馬の宗氏経由で幕府に提出された朝鮮情報、松前藩が幕府に呈した蝦夷情勢に關する文書などが収められており、阿部が斉昭に極密に内示した文書は極めて多岐にわたっていたことがわかるのである。幕府が掌握していた対外情報はほぼ逐一、斉昭に伝達されていたことが推測される。

斉昭はこれらに単に目を通しただけでなく、欧米の接近に対して幕府

はいかなる策をとるべきかを書簡の中で逐一提言している。また斉昭は阿部経由で得た当時の幕府のトップシークレットというべきこれらの外交情報を決して独占せず、自らが「有志」と見込んだ大名たちに流していたのである。

二 対外情報の交換

弘化年間以降、斉昭をはじめとした、諸大名を対外情報収集に走らせた要因は、天保期(一八三〇―一八四四)には緊張の度を増してきた欧米列強の日本沿岸への接近であった。特に一八四〇年(天保十年)に勃発したアヘン戦争において清国がイギリスに敗北したニュースは大きな衝撃をもってこれらの大名に受けとめられたのである。それはこのニュースが斉昭と諸大名との書簡においてたびたび話題にのぼっていることから明らかである。

斉昭は一八四三年(天保十四年)に時の老中水野忠邦(一七九四―一八五一)に宛てた書簡の中でアヘン戦争とその後の南京条約に言及し、さらにこう述べる。「諸夷も此の節は手明きと相見え候へば、明日にも此の地方へ寄せ来り候も計り難く候処、防禦の手明きを一意に考へ候へば、何れの浦々へ来り候とても容易ならず」⁽³²⁾ 欧米列強の侵略的野心はまもなく日本に及ぶであろう。もし彼らが攻め入ってくれば「何ほど守衛の武士死を以て防ぎ候とても必至覚束なく候」⁽³³⁾と、早急に外国と対等に戦える兵器と戦艦を製造する必要性を説くのである。

幕府もアヘン戦争後は対外危機を重く見、長崎に入港するオランダ船

から別段風説書を提出させ、積極的な情報収集に乗り出した。齊昭の対外情勢に対する関心はすでに概観したが、齊昭と親交があった諸大名たちもかかる情報入手、書簡の中でも積極的な情報交換を行っている場面が多く見られる。

例えば伊達宗城は一八四六年（弘化三年）十月五日の書簡の中で長崎に来航したオランダ船が伝えたアヘン戦争後の清国の様子を齊昭に伝えている。「満清も当秋蘭船密奏仕候別段風説書之様子にてハ、之外に、仏夷と北亜墨利加合同国と此両国よりも随意勝手手の交易申談候処、皆々夷虜か如所存相成候³⁴」このようなイギリスに制圧された清国の状態を嘆いて「已に被髮左衽ニ相成候勢顕然、聖賢之道も是迄と扱々嘆息仕³⁵」とも言う。宗城とその父親の伊達宗紀は、オランダ船が幕府に提出した風説書の入手に成功していたようであり、風説書を内密に写し齊昭に送ったという記述は、その後も弘化三年十月二十一日、嘉永元年五月三日、同年九月十一日等の書簡に見られるのである。³⁶

齊昭の方からは一八四六年（弘化三年）五月七日付の書簡において、同年に浦賀に来航したアメリカ人ビッドルの来航の図を宗城に貸与している箇所が見える。齊昭が阿部経由でビッドルが幕府に提出した文書を手入していたことは既にふれたが、この情報を宗城へ流していたことがわかる。また一八四八年（嘉永元年）五月三日の書簡においては齊昭が極秘に所蔵していた『阿美彙聞』を宗城が借覧したいことを願い出ている箇所が見える。

以上述べたことから、アヘン戦争における清国の敗北をかつてない深

刻な危機と受けとめた齊昭や諸大名たちは、欧米列強のアジア進出の動向を探るべく、弘化年間以降、オランダ船が幕府に提出した風説書を極秘に入手、さらにそれらの写しを送りあつたり、書簡においてその内容を伝えあつていったことがわかるのである。

このように清国の二の舞を避けようとする諸大名の焦燥感には日本各地へ来航する外国船に関する情報や国際情勢を渴望させるに至った。中でも蝦夷や琉球は文化年間（一八〇四―一八一八）からすでに外国船がしばしば姿を見せており、弘化年間にはその緊張度は増していた。齊昭は阿部宛の書簡の中で「琉球蝦夷を奪レ夷狄共出城をかまへ申候上は南北より日本は挾打ニ致サレ³⁷」と述べており、蝦夷と琉球を日本の南北の砦として最重要視していた。日本の独立を保守するためにはまずこの両砦を死守せねばならない。齊昭が琉球と蝦夷の情報に関しては格別、注意を怠らなかつた所以はここにある。

琉球に対する欧米列強の貿易要求はアヘン戦争以後、一段と頻繁になった。琉球への外国船の来航や外国人滞在に関する情報、および個々の事件に関する届書は琉球から薩摩藩へ刻々と報ぜられた。既に見たように齊昭は阿部経由で薩摩藩が幕府に提出した琉球に関する報告書および外国からの届書を手入していたが、琉球情報の別ルートとして薩摩藩とのコネクションをも有していたのである。島津斉彬が齊昭へ琉球情報伝える場面は両者の書簡においてしばしば見られる。

その数例を挙げてみよう。一八四六年（弘化三年）五月二十二日、斉彬は齊昭に同年四月五日、琉球にイギリス船が渡来、医師のベッテルハ

イムが妻子と中国人通訳と共に上陸したことを報告、四月八日にはフランス、オランダ、スペイン人三百人をのせたフランス船が来航したことを報告している。⁽³⁹⁾ 斉彬はこの一件について取り急ぎ報告した後、「右之段、近日中、御届書取揃、御内々可申上と存居候。先ツ大意申上候、明日明後日之内二書面差上候可仕候」と付言している。「明日明後日之内二」という言葉から彼らの情報伝達は敏速に行われことが推測されるのである。

斉彬は琉球情勢に関して、書簡の中でたびたび別紙を付して詳細な報告書を作成、一八四六年（弘化三年）閏五月二十四日付の書簡では琉球の地形、風俗に関する長文の報告書をしたため、斉昭へ書き送っている。

このように斉彬が逐一、かつ詳細な報告をした理由には当然斉昭の強い要請があったからである。斉昭は一八四五年（弘化二年）十月十一日の書簡において「其後ハ異船之義も不承候処、何ぞ珍事も有之候ハ、極密承り申度候」とその関心をあらわにしている。また一八四七年（弘化四年）六月二十三日付の書簡において、斉昭は斉彬に対して琉球に関する質問書を作成、斉彬はそれらに対して丁寧な返答文をしたためている。⁽⁴²⁾

伊達宗城も島津斉彬と親交があった。一八四六年（弘化三年）八月九日付の書簡に「琉球仏夷一条此間大隅守方へ要事ニ罷越密話仕候処、先二出船仕候処、当年より又来年ハ大切と奉存候、尚又聞出候は、可奉申上と奉存候」とあるように斉彬を通じて琉球情勢を把握していた。斉昭

との書簡においても琉球に関する情報交換は行われているが伊達との間では蝦夷地の海防問題に関する議論が活発に交わされたことに注目したい。

三 蘭書貸借

斉昭と有力大名との間に交わされた書簡の内容の中でまず目を引くのは、頻繁な蘭書貸借である。斉昭は藩政から引退を余儀なくさせられていたこの間、貪欲に蘭書の翻訳書をむさぼりよみ、欧米の軍事知識を吸収していた。

実際、斉昭は水戸藩の天保改革に着手した直後、「国許へ時々異国船も参り候へば毎々より蘭学者之入用之事も可有之」という意志を表明、一八三一年（天保二年）には蘭学者、青地林宗（二七七五—一八三三）を招聘した。青地の没後は高野長英（一八〇四—一八五〇）の尚歯会メンバーとして活躍した幡崎鼎（？—一八四二）を召し抱え兵学関係の蘭書の翻訳にあたらせている。⁽⁴⁵⁾

一八三六年（天保七年）二月には大砲の製造に着手、一八三九年（天保九年）までに十四門の大砲の製造に成功、その翌年には自ら設計図を作成し、さらに大規模な巨砲の製造に取りかかっている。一八四二年（天保十三年）には洋式砲術に熟練し後の幕府の軍制改革に影響を与えた高島秋帆（一七九八—一八六六）に水戸藩家臣を入門させ、その高度な洋式砲術を学習させている。また特筆すべきこととして斉昭は早撃ちの機能を有した三眼銃、六連発短銃、八連発短銃なども自ら考案して作成

している。後述するように、齊昭は非常に多量の洋式軍艦や武器製造の解説書を蔵書として持っていたから、招聘した蘭学者が翻訳した蘭書の内容をもとに洋式の武器や軍艦の製造法を学び、習得していたと考えられるのである。⁽⁴⁶⁾

齊昭は一八四五年(弘化二年)十月十一日に島津齊彬に宛てた書簡の中で島津家所蔵の蘭書目録を送ってくれるよう要請している。

先達 御所蔵蘭書目録御問合申候処、今以何等御答も無之候へ共海外へ広り候品、拙老へ御秘にも及申間敷、彼の術を取て彼を防禦し乍不及天下の御為に士度事二候故、可相成ハ御申聞ニ致度候也⁽⁴⁷⁾

齊昭は「彼の術を取て彼を防禦」するために、また「天下の御為」に持っている蘭書の全てを隠さず見せるよう願うのである。また「御用ニ候ハ、いつ二ても入御覧様可致候、右之外和漢書ニても、手元所蔵ニ御座候分ハ、御好之分入貴覧可申上故、無御遠慮被仰越候様ニと存候。」⁽⁴⁸⁾と述べており、自分の蔵書に關しても和蘭を問わず貸与するので、遠慮なく申し出るようにと云うのである。

島津齊彬はこのような齊昭の求めに対し次のような承諾の返書を著している。

蘭書の儀、珍敷品も無御座候得とも、書目差し上げ申候、とても御用立候品に御座有間敷奉存候、当年に是非炮術之新書取寄候答ニ

仕置候間、長崎から参次第、早々申上候用可仕候、昨日之ゼー・アルルレリーハ余程珍敷和解書ニ御座候間、御沙汰次第、四五冊ツ、差上候様可仕候、全部三十冊ニ御座候、此以後珍敷書類、外から借出シ候ハ、御内々申上候様可仕候間、何卒御蔵書内も、不苦御品拝借奉願候⁽⁴⁹⁾

『ゼー・アルルレリー』とは日本語名『海上炮術全書』である。その和訳本が手元にあるので希望があれば謹呈すること、自分の方からも砲術関係の新書が長崎から届きしだい齊昭に送ること、さらに今後も珍しい書が手に入りしだい密かに連絡をするので齊昭のほうも蔵書を隠すことなく見せてほしいこと等を願っている。この書簡以降、両者の頻繁な蘭書貸借は始まるのだが、この最初の双方の書簡からだけでも二人の蘭書収集に対する大変な意欲と西洋に対する関心が十分うかがい知れるのである。島津齊彬との間に貸借された蘭書は兵学関係の図書が中心であったが、その他にも牛種種痘、種樹書、印影鏡等に関する翻訳書等、多岐にわたっている。

また伊達宗城や島津齊彬の書簡の中には齊昭がかなりの数の蘭書を所蔵していただけに飽きたらず、最新の蘭書や風説書等の幕府所蔵の外交文書を常に入手していたことをうかがわせる内容が多くある。以下は伊達宗城の齊昭宛の書簡の一節である。

高四蔵書目相下り候ハ、其内より相願度と存罷在候儀故、只今別段奉申上候様にハ難相成、兵書、大小銃製造打方・訓練・製薬

法・台場築立方・軍艦・輕舸・蒸氣船・海陸戰陣攻守之法、右等之部類ニ御座候は、何分渴望仕候儀に御座候得共、乍恐公辺ニ而御禁忌ニ相成候⁽⁵⁰⁾

宗城は高島秋帆（一七九八—一八六六）より幕府が押収した蘭書の借覽を希望したが、幕府がそれを許可しなかったことを嘆いている。そしてさらに斉昭に幕府所蔵の蘭書を借覽するための便宜をはかつてくれるよう要請しているのである。「前文相認候部類之蘭書、数々御秘蔵可被為在と奉存候間、何卒御書目御密示奉希上候、愚僕相願置候官庫蘭書ハ、是非工夫仕、願相叶候様仕度と奉存居候」⁽⁵¹⁾すでに詳しく述べたように、斉昭は当時、すでに幕府の老中であつた阿部正弘と親交を深めており、阿部を通して幕府秘蔵の蘭書や長崎通詞所有の蘭書、および風説書の借用にたびたび成功していた。

さらに斉昭は頻繁に長崎にも蘭書を注文し、宗城や斉彬に対し便宜をはかつていた。以下に挙げる一節は一八四七年（弘化四年）七月二日付の宗城の書簡の一節である。

崎陽へ御注文ニ相成、御取寄之御都合相整候間、兵書とか、銃書とか、医書とか申儀奉言上候様、無用之書、且切支丹の事杯相認候書ニ而ハ、迷惑之御儀、実用ニ相成候ハ、御注文被仰付候半と、委曲蒙御教示、奉恐畏候⁽⁵²⁾

斉昭が、キリスト教関連の書でなく実用に役立つ書であれば自らが長崎

に注文し、調達の便宜をはかることを申し出たことがわかる。斉昭は長崎より入手した蘭書を度々極秘に宗城に貸出していた。また一八四九（嘉永二年）三月十七日付の書簡には「訳官榎林某も先日出府仕、蘭書相応持越申候、少々私儀も蔵得致候含にて、当時専ら見合最中に御坐候、兼而御注文被為在候分ハ、最早御蔵弃被為在候や奉伺度」⁽⁵³⁾という一節が見え、長崎通詞所蔵の蘭書に關しても宗城は大きな関心を寄せ、斉昭に伺いを立てている。このように宗城は通常ならば入手困難な蘭書を斉昭を通して頻繁に入手しようとしていたのである。斉昭が自らの蔵書を含めた極秘文書を貸与していたことは、「密写」、「密借」、「禁忌御深秘本二付一切口外不仕様被仰付、是ハ乍恐御安慮奉願候」⁽⁵⁴⁾等の宗城の言葉からも推測できるのである。

以上述べたように、伊達宗城や島津斉彬は斉昭が持っていた幕府とのコネクションや特権的立場を利用して、通常ならば入手困難な文書の閲覧に成功していたのである。

さらに彼らは斉昭の蔵書にも大きな関心を寄せその貸与をたびたび願っている。かかる要望は、一八四六年（弘化三年）から一八五八年（安政五年）七月まで斉昭に書き送つた書簡の多くに見られる。斉昭の蔵書は「蘭癖」と風評されたほど蘭字を好んだ伊達宗城や島津斉彬にとってさえも非常に魅力のあるものであつたようである。それは二人が書簡の中で斉昭の蔵書をしばしば「密冊」⁽⁵⁶⁾、あるいは「珍書」⁽⁵⁷⁾と呼んでいることから推測可能である。島津斉彬の書簡には斉昭が新たな蘭書を入手したか否かを問う一節も見られる。「将亦此節イキリス、ブツク之珍書

御取入ニ相成候やニ外から承知仕候」⁽⁵⁸⁾

以上述べたように、齊昭は宗城や斉彬等の大名に対し、蘭書や極秘の外交文書を積極的に調達し、彼らの対外情報収集、および蘭学学習に対し、協力を惜しまなかった。こうした働きはこれらの大名の蘭学学習を助け、対外情報に対する認識を深め、結果的には欧米に対する意識改革に大きく貢献したと言えるだろう。

四 蘭学知識の交流

それでは齊昭と島津や伊達らの大名はいかなる情報や知識を交換していたのだろうか。これについて具体的に見てみよう。まず齊彬との書簡には銃などの洋式武器の製作法に関する具体的知識を教示しあう場面が多く見える。

まず齊彬の一八五三年(嘉永六年)正月の書簡に六挺筒を極秘で入手したとの記述が見える。「蓮根炮之義、思召ニ相叶難有奉存候、外ニも六挺炮之仕掛違之品、極密入手仕候間、只今国元ニて寫付候間、出来之上可差上候、ゼルマニー之筒ニ御座候」⁽⁵⁹⁾この直後、薩摩藩ではこの六挺筒を参考に実際の製造に着手、試作品を齊昭に呈している。同年八月には次のような一節が見える。「六挺からみ之筒も近々成就仕候間、近便ニ差上候様可仕候」⁽⁶⁰⁾また同書簡には綿火薬の製造法を齊彬が教授している場面も見られる。「綿薬之儀、先此申上候法之通ニて、緑礬水気取り候節ニ赤色ニ相成候程ニ、火二掛、直二油を蒸溜仕候得は宜敷段、長さきより承候間申上候、猶試候ハ、差上候様可仕候」⁽⁶¹⁾薩摩藩の綿火薬の製造

はその後、着々と進行したようで、同年十二月には「綿薬も彌出来仕り、此間十五間ニて三分板試仕候處、打抜き申候」⁽⁶²⁾と、綿火薬の試験に成功、近々齊昭に呈することを報告している。このように齊彬は藩内で製作した武器を逐一齊昭に呈し、その試験を要請しているのである。また同書簡において齊彬は「大船も先御伺差出候間、早目に御差出之程奉願上候」⁽⁶⁴⁾と一八五三年(嘉永六年)の大船建造解禁の令に対応して、齊昭の指示を仰ぐ場面さえ見られるのである。

次に伊達宗城との交流について見てみよう。宗城の場合、齊昭の兵学に関する西洋学術の知識を具体的に求めているのが大半である。以下はその一例である。

軍艦御免相成、難有早速製造仕可、凶面にて伺候様被仰出候間、来春ハ奉伺候半と相合居申候、(中略)造作不分明之儀も御坐候間、尚追々奉伺度、御国元にて御造立可有御坐候、可相成ハ修行ニ家僕差出度奉存候⁽⁶⁵⁾

宗城はペリー来航の三ヶ月後、幕府が大船建造の禁を解いたことについてふれ、宇和島藩においても早速大船建造にとりかかりたいとし、その製造方法について齊昭に伺いを立てている。

また宗城は齊昭が水戸の天保改革の中で導入した洋式軍備や洋式軍制に関しても教示されることを願っている。一八四六年(弘化三年)十二月十四日付の宗城の書簡には次のような一節が見える。

先年於千束原御演武之節之御軍令、御機密之御儀とハ奉存候得共、

何卒御内々拝見仕度奉希候、拙家は迄確定仕候軍令無御座ニ付、此節愚考之儘草稿仕候処、何分愚昧短才の儀、不束之儀而已ニて当惑仕候ニ付、御明令拝見仕候ハ、右を基本と仕度、依而奉願候間、御聞答奉希候⁽⁶⁶⁾

宗城は宇和島藩令の制定のため斉昭が天保年間に行った軍事演習、追鳥狩の軍令を手本にしたことを願っている。また一八五〇年(嘉永三年)六月に宗城は、宇和島藩において硝石製法を試験中であることを報告、斉昭に対して火薬や弾薬の製造法の伝授を求めている箇所は、一八四六年(弘化三年)八月や翌年七月を始めとし、頻繁に見られる。かかる宗城の要請に対し斉昭は快く応じたようで、一八五〇年(嘉永三年)七月の書簡の中で、硝石の精製法、それによる銃の製造法、軍艦の構造等を宗城に教示している。軍艦の構造に関しては、自ら詳細な図を描いて説明をしている⁽⁶⁷⁾。さらにこの後、次のように付言するのである。

御尋向ニ付、異説等認申候へ共、尚又鍋・黒・松越・薩州・藤堂・真田等其外多の有志へ御問の上、是非の義ハ御定が可然候事明論も有之候ハ、御教示可給、又有志の中よろしき考ニても御聞及候ハ、是亦承り申度候、此段御頼置申候⁽⁶⁸⁾

自分の説に関しては松平慶永や島津斉彬、鍋島直正(一八一四—一八一七)らにも意見を聞くように、と忠告するのである。ここには決して自分の説を絶対視することなく「有志」大名に広く意見を求めようとす

る柔軟な態度が表明されている。諸大名に対し、斉昭が教示した蘭学知識は軍事関係が中心であったが、これにとどまらなかった。

一八四八年(嘉永元年)七月八日付の伊達宗城宛の書簡に「留飲論」なるものがある。「留飲」とは胃の不消化、今で言えば胃酸過多症のことであり、斉昭はその原因を分析し治療法を自ら考案、宗城に対し、伝授しているのである。斉昭は「留飲」がおこる原因をこう説明する。

湯茶を不吞して指支不申程ニするも、其本を押して見る時ハ、腹内の乾く故ニ、湯茶を不吞ハ指支る事故、不乾仕法をすべし、其仕法といふハ生牛乳又ハ白雪膏杯常々用べし、是ハ油故ニ内を潤し渴を止る故、常々用る時ハ、湯茶なくして指支ハなき事也、又渴く時ハ白雪膏をませて用を済すべし、是を常用る時ハ大小用の通利もよき也⁽⁶⁹⁾

「白雪膏」とは牛酪(今で言うバター)に対する斉昭独自の呼称である。「留飲」は酒や湯茶などの「悪水」が腹に溜まることよって起こるのであり、その予防法として牛乳や牛酪を服用すべきであると提案するのである。つまり斉昭は牛乳や牛酪を薬剤として活用していたのである。さらにこれらは西洋からの輸入品ではなく、斉昭の指示のもとで水戸で飼育されていた牛の乳から製造されたものであった⁽⁷⁰⁾。

また水戸藩では一八五〇年(嘉永三年)、本間玄調による牛痘種痘が実施されたが、水戸藩での牛痘種痘の実現には薩摩藩の協力があったことも見落としてはならない事実である。『水戸藩史料』別記の中に「牛痘

種は嘉永二年に至りて和蘭より長崎に輸入すと聞き公は松平齊彬に託して其の種を求め⁽⁷¹⁾とあるように、齊昭は嘉永年間にはすでにオランダからの輸入品である牛痘を薩摩の島津齊彬を介して入手していたのである。

島津齊彬が齊昭に牛痘を献上していたことは一八四九年(嘉永二年)十二月二十七日付の島津齊彬の齊昭宛の書簡に「牛痘之苗奉差上候」、「牛痘新書和解相添入御覽申候」⁽⁷²⁾とあるのでわかる。齊彬は牛痘に加え牛痘に関する蘭書の翻訳を齊昭に謹呈したらしい。謹呈した牛痘の有効期限、そして牛痘種痘の具体的な方法について同書簡の中で記している。水戸藩の最初の牛痘種痘は、この書簡が出された翌年に実施されることを考えあわせると、水戸藩の牛痘種痘の普及には薩摩藩の協力によるところが大であったことがわかるのである。

以上、齊昭と宇和島藩主、伊達宗城および薩摩藩主、島津齊彬との間に交わされた蘭学知識の交流について概観した。彼らの交流から活発な蘭書や蘭学知識のやりとりが行われていたことがわかるのであるが、特に齊昭は事実上、幕府秘蔵文書や長崎経由の秘密文書等、入手困難な文書の調達役として貢献していたことがわかる。また伊達宗城との往復書簡の内容からすでに明らかのように、自らが得た蘭学知識を宗城に対して頻繁に教示していたのであり、他の「有志」大名に対してもその知識をオープンにするよう努めた。

火薬や洋式銃の製造に関しては、薩摩藩(齊彬)→水戸藩(齊昭)→宇和島藩(宗城)と情報の伝播が見られるのであり、ここに齊昭を中心とした

西洋情報ネットワークが形成、かつ機能していることが看取できるのである。齊昭のかかるはたらきは当時「蘭癖」と風評された宗城や齊彬の蘭学学習を大いに助けたであろうことは間違いない。特に宗城にとって齊昭は常に蘭学の指導的存在であったことは宗城の言葉からも明らかである。宗城は齊昭が蘭学において非常に博識であることを敬し、その蘭学の知識を常に教示されることを願っていた。⁽⁷³⁾海防等に関する人の意見書を齊昭に呈した時も「何卒難被遊御落意儀、且存込違ハ乍恐御朱書被成下度奉存候」⁽⁷⁴⁾と齊昭の添削を希望している。実際、齊昭は伊達や島津らの書簡をたびたび朱書きで添削をし、返却するといったことをしている。また宗城の書簡の中には「御卓絶の高論御教示被成下候」という下りがしばしば見られ、齊昭の当時の蘭学の知識の程度をうかがわせる。⁽⁷⁵⁾

五 蘭書の公開

以上述べてきたように、齊昭は諸大名たちに対外情報や西洋知識をオープンにし、彼らの西洋情報収集に常に協力を惜しまなかったと言える。蘭書や幕府秘蔵文書の公開に関しては、一八四六年(弘化三年)二月十八日付の書簡の中で齊昭は阿部に対してこう説得している。

蘭学も開け候上ハ急々御制禁ニも被遊兼候ハ、責てハ彼が術を取候而彼よりも又一段優り候事を考へたとへハ彼が大銃ハ二十町を限りと打候ハ、我ハ廿五町三十町も打候様彼が船一時十里を走り

候ハ、我ハ一時二十五里二十里も走り候と申如く一段ツ、彼よりも長し候様ニ無之候而ハ防禦必勝ハ難得キ事ニ御座候⁽⁷⁾

蘭学を禁止することは「無術」である、という論は天保期、水野忠邦（一七九四—一八五二）に宛てた書簡にも見えるが、この一節は斉昭の蘭学に対する態度がより積極的になってきたことを示すものである⁽⁷⁸⁾。彼の術をとって彼よりも一段勝れることめざすべし。欧米の科学技術を吸収してそれ以上に卓越した兵器を開発することが肝要である。西洋の科学技術知識学術の受容なしでは欧米による侵略の危険性を日本は回避することは不可能であるという見解を明らかにした上で次のようにも述べている。「知彼知己則百戦不殆と申候得ハ彼蘭学有之上ハ公辺公辺ニ於ても彼が兵書銃書等悉く和解被仰付候て天下へ公然と御示し被遊⁽⁷⁹⁾」と幕府の官庫にある蘭書を翻訳した上で天下へ公表せよ、というのである。そして全国には諸家において秘蔵されている蘭書が多いことを憂い、「彼国の兵書炮書等統て彼を防禦する用ニ相成候書ハ有ん限り舶来へ被仰付候て不残御買上ヶ被遊和解被仰付候而御拂ニ被遊天下へ公然と御示し被遊候義可然奉存候⁽⁸⁰⁾」とそれらに関しても幕府が買い上げ、天下へ公表すべきことを主張する。

もちろんかかる斉昭の蘭書公開の議論は、無制限な公開を意味するものではないだろう。また、その対象も選ばれた大名、いわば彼が「有志」と認めた人物であることを前提としていよう。斉昭の蘭学への強烈な警戒心は生涯消えることがなかったと思われるが、蘭書の調達役とし

て、さらに蘭学の師としてのはたらきは諸大名の蘭学学習を促し、西洋学術に対する彼らの意識改革を促した、という点においては一定の評価がなされるべきであろう。

むすび—幕末史における斉昭の貢献

以上述べたことからペリー来航前後の時代、徳川斉昭を中心とした諸大名間において対外情報および西洋学術の摂取を目的とした情報ネットワークが事実上形成され機能していたことがわかる。しかし斉昭の持っていた情報ネットワークは本稿で言及したのみにとどまらず、松代藩主、真田幸貫、佐賀藩主、鍋島直正、金沢藩主前田斉泰、黒羽藩主、大関増業、津藩主、藤堂高猷らにも及んでいた。すでに述べたような島津斉彬や阿部正弘、伊達宗城らとの交流は斉昭の持つ情報ネットワークの氷山の一角にすぎない。また本稿で扱ったプライベートな書簡から、従来とは異なる斉昭のイメージが浮上してくる。斉昭は蘭書の調達、蘭学知識の教示、対外情報の伝達を先頭に立って行ったのであり、いわば彼はこのネットワークのリーダー的存在であったと言える。

弘化年間以後、対外危機が深刻さを増していった状況は、斉昭をはじめとする日本の将来を憂える大名に対して、藩を越えた人材、知識、技術の導入の必要性を切実に痛感させたのであろう。これまで述べてきたような斉昭のはたらきは、無論、制限つきではあるが「天下の為」、蘭書や蘭学知識を包み隠すべきではないことを暗に示したと言える。斉昭の書簡や幕府への意見書の中には「天下」という言葉が頻繁に出てく

る。つまり齊昭の中には藩の枠組みを越えた「天下」という概念がすでに意識されていたのであり、だからこそ藩を越えた知識、技術、人材の交流に積極的であったのだろう。

もちろんこのようなネットワークは齊昭が「有志」と認める大名、その他選ばれた人たちといった非常に限定されたサークル内の中で行われたことは否めない。また水戸藩では蘭学者を招聘し、蘭書の翻訳、後進の蘭学生の育成にとめたが、学ぶ学生を少人数に限定し、自由放任を決して許さなかった。このような権力による統制が水戸藩の後進の蘭学者の育成を阻止し、薩摩藩や宇和島藩のように、洋学へ発展する道を阻んだと思われる。

幕末政治史の表面に表れる徳川齊昭は、ペリー来航後、開国和親策に傾く幕閣とは相いれず、生涯、頑固に主戦論に固執、またその極端な言動からたびたび幕府から嫌疑を受け中央政治から排斥されていた。これまで先学によってたびたび指摘されているように、主戦論が彼にとって国内の士気を昂揚させる戦略的手段であったとしても、当代の内憂外患を克服すべく何ら有効な策を打ち出せず、ペリー来航以後の幕政に何ら貢献しないまま、政治の表舞台から姿を消したのである。このように幕末史の表面に表れる彼の言動、主張された具体的政策を考慮し、一政治家としての彼の技量を評価するとすれば、否定的な見解を出さざるを得ないであろう。しかしここでは齊昭の幕末政治史における影の貢献に着目したのである。

既に述べたように齊昭にとって弘化年間の隠遁期間は、政治家として

の表舞台での活躍を閉ざされたにせよ、着実に私的な情報ネットワークを構築し得たという意味においては大変有意義な時期であった。齊昭は親交を深めた「有志」大名に対し、当初から言路を開くこと、蘭学知識をオープンにし、「有志」大名から広く意見を求めるべきことを主張、老中阿部正弘に対しては従来の幕閣と譜代大名による閉鎖的な幕政を批判、広く「有志」の意見を求めるべきであった。ペリー来航後、阿部はそれまでの慣例を破りアメリカ国王の国書を諸大名に公開、広く意見を求めたことは周知の事実であるが、このような阿部の決断には齊昭の常日頃の主張が効を奏した面もあると考えられる。

また弘化年間という日本が今だ太平の眠りから覚めやらない時期から大名らに対し、蘭学の有用性、彼我の兵力の差を具体的に説き、頻繁に自らの蘭学知識を伝授したことは、太平の世に安住していた大名に対外危機意識を植え付ける効果をもたらした。さらに齊昭は、御三家という特権的立場と阿部正弘との親交を最大限利用することによって、諸大名に蘭書や幕府の秘蔵外交文書の調達を積極的に行い、時には自らの蘭学知識を懇切丁寧に伝授したが、このような齊昭の尽力は彼らの蘭学学習を大いに助け、結果的には西洋諸国や西洋学術に対する大名の意識改革を促したといえる。齊昭と親交があった大名は後に積極的な藩政改革に尽力したり、雄藩として幕末政治史を左右するような活躍をし、後に「幕末の四賢侯」と称されることになることを想起すれば、齊昭の働きは決して表に出ることはなかったにせよ、「有志」大名のその後の活動や思考に影響を与えたと言えるのである。

注

- (1) 斉昭を含めた水戸藩の蘭学撰取に関する戦前の論考は以下の通りである。有馬秀雄『水戸魂の科学性』霞ヶ関書房、一九四一年。關一『水戸烈公の国防と反射炉』誠文堂新光社、一九三六年。高須芳次郎『水戸学講話』今日の問題社、一九四三年。
- (2) 水戸藩において斉昭が打ち出した蘭学政策に関する一連の経過は『水戸市史』中巻(三)(水戸市役所、一九七六年)所収、(以後、『水戸市史』中巻(三)と省略)「第十七章第五節水戸藩の洋学と排耶思想」に詳しい。
- (3) 福田耕二郎『徳川斉昭と蘭学』、『水戸史学』第一三三号、一九八〇年一月、一七頁。
- (4) 鈴木暎一『水戸藩学問・教育史の研究』吉川弘文館、一九八七年、二〇二頁。
- (5) 同書、二〇二頁。
- (6) 斉昭の西洋学術への関心を指摘した論考に関しては、本文に挙げた以外に次のようなものがある。秋山高志『徳川斉昭の欧米地理歴史知識』、西垣晴次先生退官記念宗教史・地方史論纂編集委員会『西垣晴次先生退官記念宗教史・地方史論纂』所収、刀水書房、一九九四年。同『徳川斉昭の科学・技術知識——諸物会要の世界——』、沼尻源一郎『水戸の洋学』所収、柏書房、一九七七年。
- (7) ベリー来航後、条約締結までの政治動向、および内戦外和論、ぶらかし策等の対外政策、対外意見に関する一連の経過に関しては以下の論考に詳しい。石井孝『近代史を視る眼』吉川弘文館、一九九六年。正戸千博『幕末政局に関する一考察——徳川斉昭の幕政登用とその動向を中心として——』、『駒澤大学史学論集』第十四号、一九八四年二月。山口宗之『徳川斉昭小論』(山口宗之『幕末政治思想史研究』所収)ぺりかん社、一九八二年。
- (8) 攘夷の主張が斉昭の本意ではなかったことは、『籬の茨』の中で勝海舟(一八三三—一八九九)も明言している。「海外の御處置に於て、公(斉昭)の御参謀あられしよりは、御説に攘夷一戦の義を以御主張あられ、其内実

- はしからず、此故に重事実際に至ては断然たる御説聞へす」(『籬の茨』、『勝海舟全集』十一所収、勁草書房、一九七五年、一四三頁)また松平慶永の明治期に出された回顧録である『逸事史補』の中に実際の斉昭は開国論者であったことを示す箇所がある。「老公、我二贈る書中ニ云ふ、外国人交際の道、最宜敷事ニてハなし、乍併、今の時勢いかんともすることあたはず、(中略)とても攘夷など被行候事ハ難出来、是非交易和親の道、可相開、其時ハ御人力被成候かよろしく候。斉昭老年ニ、攘夷の巨魁ニて、是迄世を渡り候ゆへ、死ヌマテ此説ハ不替心得なり。貴君へ此事申入ルとの書状あり。」(『逸事史補』、『松平春嶽全集』所収、原書房、一九七三年、二七七—二七八頁)
- (9) 『水戸藩史料』上編乾、吉川弘文館、一九七〇年、五三頁。
- (10) 『昨夢記事』、『日本史籍協会叢書覆刻版』一一七、一九六八年、八三頁。
- (11) 福地源一郎『幕末政治家』(以後、『幕末政治家』と省略)平凡社、一九八九年、一六六頁。
- (12) 瀬谷義彦『新装水戸の斉昭』茨城新聞社、一九八五年、一六九頁。
- (13) 同書、一六九頁。
- (14) このような斉昭の本意を示すものとして、一八五三年六月二十二日、ペリー来航直後に斉昭がアメリカに宛てた書簡がある。この中で日本は現在、国内に様々な問題を抱えているので、アメリカの要求に即刻答えることが不可能なため、次回の来日の日時を延期して欲しい旨を記している。(『水戸藩史料』上編乾、二二—二三頁)
- (15) 石井前掲書、二二四頁。
- (16) 同書、一三二頁。
- (17) 山川菊栄、小西四郎『徳川斉昭』、『日本史探訪』第十一集所収、角川書店、一九七四年、一六〇頁。
- (18) 福地源一郎も幕閣参与後に斉昭が打ち出した政策について、同様の見解を述べている。「烈公の開戦に至りての計策は、実に取るべき程の策とも思はれずして、彼をもしらず己をも知らざるの状あれば、幕閣が烈公の説を聞きて、「是危道なり安全の計に非ず」と斥けたること、是非なき次第なりと云ふべし。」(『幕末政治家』、一六八頁)
- (19) 斉昭が西洋学術を積極的に撰取していたことについて戦前の論考に

- は次のようなものがある。有馬秀雄『水戸魂の科学性』霞ヶ関書房、一九四一年。關一『水戸烈公の国防と反射炉』誠文堂新光社、一九三六年。高須芳次郎『水戸学講話』今日の問題社、一九四三年。
- (20) 高須芳次郎『水戸学講話』今日の問題社、一九四三年、三二二頁。
- (21) 福田耕二郎『徳川齊昭と蘭学』、『水戸史学』第三号、一九八〇年一月。
- (22) 同書、一七頁。
- (23) 齊昭の蘭学摂取に対する積極性を指摘する数少ない論考の中には次のようなものがある。秋山高志『徳川齊昭の科学・技術知識―諸物会要』の世界―、沼尻源一郎編『水戸の洋学』柏書房、一九七七年。福田耕二郎『徳川齊昭と蘭学』、『水戸史学』第三号、一九八〇年一月。『水戸市史』中巻(三)〔第十七章水戸学の発展と尊王攘夷論第五節水戸藩の洋学と排耶思想〕水戸市役所、一九七六年。『水戸市史』中巻(三)では水戸藩の天保期、安政期の齊昭の蘭学摂取、それに関する数々の政策について記されている。ここでは齊昭は蘭学の導入に対して積極的であったが、生涯それに対する警戒心を解かず、蘭学を学ぶものを厳しく制限したことを指摘した上で、「そのため、万延元年八月に齊昭が死去して、洋学摂取の道が途絶えると、個人的にはともかく、藩としては何も見るべき成果を収めることができなかった。」(同書、一〇九八頁)と結論づけている。水戸藩の蘭学は、それを洋学にまで発展させた薩摩、佐賀、長州藩などのような成果をあげることが出来なかったことはここでの指摘の通りである。しかし水戸藩で行われた蘭学や齊昭個人の蘭学に対する積極的な態度が薩摩、佐賀、長州藩等幕末、洋学の先進地域となる藩に与えた影響は大きかった。決して表面には出なかつたが、かかる水戸藩の影の影響を重視するのが本稿の立場である。
- (24) 齊昭を中心とした「有志」大名グループの活動に関しては、以下の研究論考があることを記しておく。鮫島志芽太『島津斉彬の全容』(第六章「黒船騒動期の四首脳」、ペリカン社、一九八九年。吉田昌彦「幕末期の内外情勢と情報」、丸山雅成編『日本の近世』第六巻「情報と交通」、中央公論社、一九九二年。また山口宗之「徳川齊昭小論」(『幕末政治思想史研究』所収、ペリカン社、一九八二年)にもこれに関する記述がある。
- (25) 齊昭と島津斉彬との交友関係に関する研究論考については、宮田俊彦「徳川齊昭と島津斉彬―琉球渡来仏英人事件―」(『南島史学』第二一、二二号、一九八三年九月)を参照されたい。
- (26) 弘化二年二月一日 徳川齊昭書簡、阿部正弘宛、『新伊勢物語』所収、四六頁。
- (27) 弘化二年二月一日 阿部正弘書簡 徳川齊昭宛、同書、四七―五一頁参照。
- (28) 弘化三年六月一七日 徳川齊昭書簡 阿部正弘宛、同書、五七頁参照。
- (29) 弘化三年七月八日 阿部正弘書簡 徳川齊昭宛、同書、六〇―六二頁参照。
- (30) 弘化三年七月一三日 徳川齊昭書簡 阿部正弘宛、同書、七〇頁参照。
- (31) 弘化三年七月二七日 阿部正弘書簡 徳川齊昭宛、同書、七二―七四頁参照。
- (32) 天保一四年九月三日 徳川齊昭書簡、水野忠邦宛、『水府公献策』、二六〇頁。
- (33) 同書間、二六〇―二六一頁。
- (34) 弘化三年一〇月五日 伊達宗城書簡、徳川齊昭宛、三三二頁。
- (35) 同書間、三三二頁。
- (36) 中でも嘉永元年五月三日の書簡は「極密風説書抜」と題する文書が添付されており、オランダ船が提出した別段風説書の写しであることがわかる。
- (37) 弘化三年八月一日 徳川齊昭書簡阿部正弘宛、『新伊勢物語』八二頁。
- (38) 弘化三年閏五月二二日 島津斉彬書簡 徳川齊昭宛、『島津斉彬文書』上巻、三三頁参照。
- (39) 同書間、三三頁参照。
- (40) 同書間、三三頁参照。
- (41) 弘化二年一〇月一日 徳川齊昭書簡 島津斉彬宛、同書、一一頁。
- (42) 弘化四年六月三日 島津斉彬書簡 徳川齊昭宛、同書、七一―七四頁参照。
- (43) 弘化三年八月九日 伊達宗城書簡 徳川齊昭宛、『徳川齊昭・伊達宗城往復書翰集』、二二頁。
- (44) 『水戸藩史料』別記上、吉川弘文館、一九七〇年、三九三頁。

- (45) 一般にあまり知られていないが、青地林宗や幡崎鼎による医師の後進指導は着実な成果を挙げていたようである。鈴木常光氏による研究論考に「藤田東湖が選んだ蘭学者大島高任略伝」(『水戸史学』第十七号、一九八二年一〇月)があるが、この中に「常陸の洋学者たち」という一覧表が添付されている。ここに青地の弟子の蘭学者として鈴木重時、吉田養木、森庸件、(鈴木重時は幡崎鼎にも師事した)幡崎鼎の弟子として松廷定雄、岡田双蔵の名が挙げられている。彼らの専門はみなオランダ語となっている。このように斉昭が招聘した蘭学者のもとで後進の蘭学者は育つていき、彼らは一丸となって斉昭の命のもと蘭書の翻訳に専念したのだろうと思われる。本節における水戸藩の天保の改革に関する歴史的記述は『水戸市史』中巻(三)「水戸市役所、一九七六年」によった。また水戸藩の天保の改革に関する論考には次のようなものがあることを記しておく。乾宏巳「水戸藩の天保改革」(『茨城県史研究』一八、茨城県史編纂委員会、一九七四年三月) 木戸田四郎「天保改革期の経済政策―水戸藩の場合―」(『茨城県史研究』二六、茨城県史編纂委員会、一九七三年八月)
- (46) 弘化二年一〇月十一日付 徳川斉昭書簡 島津斉彬宛、『島津斉彬文書』上巻所収、一一頁。
- (47) 嘉永二年五月 徳川斉昭書簡、島津斉彬宛、『島津斉彬文書』上巻所収、二二〇―二二二頁。
- (48) 斉昭は同様の見解を天保年間に時の老中水野忠邦(一七九四―一八五一)に宛てた書簡の中でも進言している。「大船を御免遊ばされ、堅固に製作いたし候へば破船と申す儀はこれなく候。阿蘭陀人等は数万里の海上を乗り、来年の期日を違はず長崎へ入津いたし候。然る處日本人は海国に生れながら十里、二十里の海上さへ日数を定め乗り候事は出来申さず、夫れのみならず、少ししく日和風波あしく候へば破船いたし候。」(『水府公献策』、『水戸学大系』第五巻水戸義公・烈公集 水戸学大系刊行会、一九四一年、二二九頁)
- (49) 「弘化二年一〇月一三日付 徳川斉彬書簡 徳川斉昭宛」、『島津斉彬文書』上巻所収、一二頁。
- (50) 弘化三年一〇月五日 伊達宗城書簡、徳川斉昭宛、同書、三五頁。
- (51) 弘化三年一〇月五日 伊達宗城書簡、徳川斉昭宛、同書、一〇頁。
- (52) 弘化四年七月二日 伊達宗城書簡、徳川斉昭宛、同書、七七―七八頁。
- (53) 嘉永二年三月一七日 伊達宗城書簡、徳川斉昭宛、同書、一九八頁。
- (54) 弘化三年六月八日 伊達宗城書簡、徳川斉昭宛、同書、八頁。
- (55) 当時の水戸藩所蔵の西洋関係の書物の詳細に関しては『水戸市史』中巻(三)「水戸市史編さん委員会、一九七六年 第七章 第五節「水戸藩の洋学と排耶思想」一九七六に詳しい。この中には「彰考館所蔵洋書一覽」、「蘭学所御書物目録」、「天文方御預御書物并御品目録」が収められている。「蘭学所御書物目録」は蘭書、地図、器物など二六四種が記されており、この内、蘭書は兵学書、科学書、医学図、製菓書など広範囲に及ぶ。「彰考館所蔵洋書一覽」に挙げられている書の大部分には斉昭の号である「潜龍閣」の蔵書印が押されている。「天文方御預御書物并御品目録」は水戸藩の天文方が斉昭より預かった書物や品物の目録である。斉昭が自ら、あるいは藩で所蔵していた蘭書は兵学書以外にもさまざまなものがあることに注目したい。例えば「彰考館所蔵洋書一覽」には医学書や音楽論に関する蘭書や世界地図、「蘭学所御書物目録」には『西洋列国史略』という書や印影鏡、絵画、「小兒教訓」、「内科書」、「洋語背誦歌」なるものまである。このような目録から斉昭がいかに多種多様な珍奇の本を多量に所持していたことが知れるのである。
- (56) 弘化三年八月二日 伊達宗城書簡、徳川斉昭宛、同書、一七頁。
- (57) 嘉永三年一〇月一六日付 島津斉彬書簡 徳川斉昭宛、『島津斉彬文書』中巻所収、六四頁。
- (58) 弘化二年一〇月七日 島津斉彬書簡 徳川斉昭宛、『島津斉彬文書』上巻、一四―一五頁。
- (59) 嘉永六年正月二四日 島津斉彬書簡 徳川斉昭宛、『島津斉彬文書』下巻、四二―六頁。
- (60) 嘉永六年八月二九日 島津斉彬書簡 徳川斉昭宛、『島津斉彬文書』下巻、七―一頁。
- (61) 同書簡、七―一頁。
- (62) 嘉永六年二月二八日、島津斉彬書簡 徳川斉昭宛、『島津斉彬文書』下巻、七七―六頁。
- (63) 島津斉彬目らが試作した綿火薬は斉昭に呈された一件に関しては「島津

- 齊彬言行録」に詳しい。齊彬は試作品を単に提供しただけでなく、その製造方法を記して取り添えたという。「其後同年夏七月頃、一函ヲ量目三百目、水戸公ニ御進呈アラセラレタリ、製造ノ方法ヲモ記シテ取添ラレ、其文ハ私共相記シ御覽ニ入レ奉リ候處、御添削遊バサレ、文末ニ彼ノ長ヲ採リ我ノ短ヲ補ヒ、武備充實、皇威宇内ニ赫々云云ノ旨ヲ御書加へ、相下サレ」(『島津齊彬言行録』、『島津齊彬文書』下巻所収、七七六―七七七頁)
- (64) 嘉永六年二月、島津齊彬書簡 徳川齊昭宛、『島津齊彬文書』下巻、七四頁。
- (65) 嘉永六年二月二五日、伊達宗城書簡、徳川齊昭宛、同書、二九一頁。
- (66) 弘化三年二月一四日、伊達宗城書簡、徳川齊昭宛、同書、六二頁。
- (67) 齊昭が自ら描いた軍艦船体の図については嘉永三年七月付の伊達宗城宛徳川齊昭書簡(同書、二五七―二六三頁)を参照のこと。船体の構造を鮎に模している点が興味深い、これも年若い宗城に対してよりわかりやすく説明するための齊昭の配慮だと思われる。
- (68) 同書簡、同書、二六三頁。
- (69) 嘉永元年七月八日、徳川齊昭「留飲論」伊達宗城宛、同書、一三一頁。
- (70) 水戸では一八三五年(天保六年)にすでに桜野牧という牛の放牧場が設立されており、齊昭がここで育てられた牛の乳から医学館の医者に牛酪を作らせてたことは次の資料に見える。これは当時の厩別当であった彦坂重秀の筆記で齊昭の行実をつづったものである。「(桜野牧)に牛ヲ御放し被遊子付之牛を御厩に為御繫牛酪を取御上り相成其余近頃医学館御医師中に被仰付牛酪御製法被遊為御救御相成候事」(『水戸藩史料』別記下、四六二頁)実際、医学館には牛乳やこの牛酪を作るための飼育場があった。
- (71) 『水戸藩史料』別記下、三三二頁。
- (72) 嘉永二年二月二七日 島津齊彬書簡 徳川齊昭宛、『島津齊彬文書』上巻、二五六頁。
- (73) 齊昭の多方面への関心を示す著書に『諸物会要』がある。本書は齊昭が青年時代から収集した記録画集である。その内容は彗星や月食、流星などを描いた天文関係、地理、人事、飲食、草木、禽獸、など多岐にわたっている。「人事」の項には水戸藩に来航した異国船の図や黒人やロシア人などの外国人の絵がある。興味深いものとしては、「噴水仕掛け図」、「西洋時計図」、「オランダ時計并時刻法」などがある。本書に関する研究論考には秋山高志「徳川齊昭の科学・技術知識——『諸物会要』の世界——」(『沼尻源一郎編』『水戸の洋学』所収、柏書房、一九七七年)が詳しい。
- (74) 弘化三年一〇月五日 伊達宗城書簡、徳川齊昭宛、同書所収、三三二頁。
- (75) 弘化三年六月八日 伊達宗城書簡、徳川齊昭宛、同書所収、九頁。
- (76) 『幕末の水戸藩』(岩波書店、一九七四年)の著者である山川菊栄氏は本書の中で齊昭の外国研究に関して次のように述べている。「齊昭は外国事情を紹介した書物などには注意を怠らず、それを読み終ると水戸の延光のもとに送り、石徳にも読ませよという注意書きがそえられ、たびたび筆者も命じている。書物の数も相当のものである。」(同書、一二九頁)
- (77) 弘化三年二月十八日 徳川齊昭書簡 阿部正弘宛、『新伊勢物語』、五三頁。
- (78) 齊昭は一八三八年(天保九年)に一万数千字にも及ぶ政治意見書『戊戌封事』を著し翌年將軍家慶に進呈しているが、この中で長崎貿易の停止と蘭学の禁止を強く進言している。しかし天保二年五月九日付の水野忠邦宛の書簡において「戊戌封事」での主張と同様、近年の蘭学流行を放置しておけばキリスト教の媒介になるであろうことを憂えながらも、同時に次のような心情を吐露している。(蘭学を)「俄に御制禁に相成り候はゞ、年来交易にて渡り候数多の書には物も費え、又、彼れが長ずる所の有用の分もこれあり候處、空しく焼き捨て候も無術にこれあり」(天保二年五月九日付 徳川齊昭書簡 水野忠邦宛)、『水府公献策』巻之下、御書牘所収、『水戸学大系』第五巻水戸義公・列公集、水戸学大系刊行会、一九四一年、二四四頁)このように、ブライベートな書簡の中では「戊戌封事」などの公に提出した意見書における蘭学禁止の主張を一変させ、西洋学術の導入の必要性を示唆していることに注目したい。
- (79) 弘化三年二月十八日 徳川齊昭書簡 阿部正弘宛、『新伊勢物語』、五三頁。
- (80) 弘化三年二月十八日 徳川齊昭書簡 阿部正弘宛、同書、五三頁。

* 本稿は日本思想史学会平成八年度大会における研究発表(発表題目「幕末における「有志」大名の情報ネットワーク——徳川齊昭を中心として——」)の内容をおける

基に加筆・修正したものである。

* 引用文中の旧字体は新字体に改めた。なお引用文中の括弧内の言葉は特に断らない限り、全て星山による。